

平成 28 年度 第 1 回長野県社会教育委員会議 議事概要

日時：平成 28 年 7 月 13 日（水）

午前 10 時 00 分から午後 12 時 30 分

場所：長野県庁 教育委員会室

○出席委員 浅 輪 佳代子 委員 中 島 正 韶 委員 中 條 智 子 委員
中 田 安 子 委員 中 村 礼 子 委員 西 一 夫 委員
西 村 駿 介 委員 原 礼 子 委員 伴 美佐子 委員

○講演講師 白戸 洋 氏（松本大学 総合経営学部 教授）

○県の出席者

教育委員会	菅 沼 尚	教育次長
東信教育事務所	池 内 典 和	生涯学習課長
南信教育事務所	名 子 晃	生涯学習課長
中信教育事務所	西 村 政 和	生涯学習課長
北信教育事務所	丑 丸 明 英	生涯学習課長
教育政策課	羽 根 美 咲	企画係主事
文化財・生涯学習課	高 橋 功	課長
	山 寄 哲 哉	課長補佐兼総務係長
	山 越 美 久	課長補佐兼生涯学習係長
	池 田 和 彦	生涯学習係担当係長
	蟹 澤 友 司	生涯学習係主任指導主事
	二 宮 聡 志	生涯学習係指導主事
	井 口 淳	生涯学習係指導主事

1 開 会

2 教育次長挨拶

3 会議の趣旨説明

【山越課長補佐兼生涯学習係長】 資料により説明

4 講演

演題：「社会教育の現状と課題～新しい時代にふさわしい長野県の生涯学習のあり方について（答申）（平成 21 年 10 月策定）をふまえて～」

講師：松本大学 総合経営学部 教授 白戸 洋 氏

【白戸教授】

おはようございます。ただいま紹介がありました白戸でございます。今日は、1 時間程、社会教育のあり方についてお話させていただきたいと思います。私は大学では地域社会などの科目を教えています。また、地元の町内公民館の役員をやったり、地区の公民館や市の公民館運営審議会をやったりしました。現場で 15 年ぐらい一住民として経験を積んできたと思っています。そんなことも踏まえてお話をさせていただければと思います。

生涯学習という言葉は、社会教育という言葉でずっと過去きていたのが、あるところから生涯学習という名前になって、文科省の筆頭局になりました。その時にはどちらかという、社会教育というよりも、個人が自分の力量や教養やそういうものを伸ばしていく、それに対応したような生涯学習のあり方というような流れがありました。そして、戦後 60 年、社会教育というのは衰退の一途を辿ってきたのかなと思います。法律的にもあるいは財政的にも常に削られて逆風の中できたと思います。それがここ数年、10 年、5 年ぐらい前から、かなり風向きが変わってきました。風向きとしてはまだ定まっていないのですが、微妙に日本の社会のあり方そのものが変わる中で、社会教育が問われてきています。

そんな時に長野県の生涯学習の振興のあり方についてという答申を出させていただきました。その背景について、私のレジュメを一枚めくっていただくと抜粋的に書いたものがございます。上の方をみていただくと平成 3 年 10 月に長野県生涯学習基本構想というものが策定されております。この中でどういう風に言っているかという、「だれもが自分にあった学習活動に親しみ、個性と能力を伸ばし、その成果を社会の中で活用して生きがいをもって充実した人生を送ることができる生涯学習社会の実現」と書いてあります。もうちょっと簡単にいうと、一人一人が自分の個性や教養を伸ばしましょうということをいっています。

社会教育が戦後、寺中構想という文科省の次官の構想のもとで生まれたときには、個人というよりは、一人一人の個人が尊重されることを前提にしながらも地域や社会そのものをよくしていこうという趣旨があったものが、かなり抜け落ちていってしまったのです。要するに、自分がよくなればいいやという趣旨が強くて、少なくともそういう実態に近かったのではないかと思います。

ところが平成 18 年度に、長野県が県民満足度調査をやりました。そこに書いてありますが、県の様々な施策分野の 49 項目の中で生涯学習環境の整備の満足度は上位 5 パーセントに入っていました。長野県は大変生涯学習の施設や制度、プログラムがよく準備されている

という評価を県民からいただいたわけですが、その一方でその重要度に対する評価は下から 6 番目だったのです。要するに、充実はしているけど、必要はたいしてないのではないかと、いうことを県民から言われたのです。これが平成 18 年の調査だったのです。これを受けてこれはまずいぞと、もう一度生涯学習のあり方を検討しようじゃないかと始まったのがこの新しい答申でありました。

答申には、様々な分野の方に入っていただき、信州大学の土井先生に座長をつとめていただきました。たくさん議論を積み重ねていくのですが、その中で、一番議論のポイントになったのは、個人がよくなることから地域や社会がよくなることへ視線を移すべきではないかということでした。これはもちろん、戦前の全体主義的な滅私奉公やお国のためにと、いったこととは少し異なって、あくまでも個人の尊厳や、個性を尊重しつつも、その中で人と人をつないでいくという趣旨で考えていこうということです。その結果、基本目標は、「生涯学習振興の現状と課題を踏まえて、これからの生涯学習には、個人の生きがいや教養、趣味に関する学習に加え、人や地域と関わって学び、学びの成果を人や地域に生かす生涯学習が重要です。社会の一員として地域作りに主体的に参画できる学習や活動の充実が求められています。異なる年代や多様な人々と豊かな交流や支援による学びの絆を育み、地域の学びや活動に積極的に参加することによって、地域住民が自立しつつ協働して地域課題を解決したり地域の価値を創造したりする力である地域力を高めることとなります。」となりました。

過去、戦後公民館の創生期から、公民館の活動の中で踊りを踊るグループとか、歌を歌う会だとか、教養・文化に関わるような活動が大変ありました。そういう積み重ねも多くやっていました。始めた頃はそういうことを通じて地域のつながりを作ったのです。戦前・戦中というのは、地域社会はどちらかというと相互監視みたいところがありました。朝の連続ドラマでも出てくるような組長さんが相互監視の役割があって、戦争遂行のために町内会だとかを利用したという経緯もあります。どちらかというと人と人とかかわることに、ある種の怯えとかかわだかまりをもった人が多かったと思います。その中でそれをもう一度、地域の人と人とのつながりを築き直し、仲間をつくることで仲間をベースにして、いろんな地域社会の問題に取り組むというそういう趣旨の中で公民館の活動が行われたのです。文化教養もあれば、生活改善の減塩運動とか、あるいは保健指導員さんと一緒に健康づくりだとか、農業についての勉強会だとか、そういうことを初期の社会教育の中では進めていったという経緯がありました。

しかし、これが大きく変わってきてしまったため、基本的には地域課題を解決する、あるいは地域社会そのものをどうするかを考えるということに少し移そうじゃないかということで、答申を当時提出させていただきました。先に背景をレジュメの 1, 2 で説明させていただきました。

私どもの大学は今週末で前期が終わりますが、宮城県の石巻市の大街道小学校に震災後 4 月からずっと細く長く支援活動を続けています。今は、週に一回学生と教員が行って、向こ

うにアパートを借り、そこに泊まって、2泊3日で子どもたちの学習支援をやっています。それから月に一回、学校がカウンセラーを派遣して子どもや親や先生たちの話を聴くというのを今も続けています。

その大街道小学校に4月ごろ行ったときに、ちょうど四十九日が終わったぐらいでした。そこは、4mぐらいの津波がきたところで一階が全部水浸しになってしまいました。2階が辛うじて残っていて天井までいった家もありました。家は泥だらけなのです。そして海岸べりなので、津波がいった返ってきているので車などいろんなものが点々とあってとても人の住めるような状態ではありません。そんな中で小学校の2階から上に避難され、4月ぐらいに体育館に移られたのです。四十九日が終わってこれからどうしたものかというような時でした。

その時に、不思議なことがありました。海岸べりからはかなり離れた場所に石巻専修大学があります。大学の中にボランティアセンターが置かれていて、そこから毎朝、大型バスで何台にもわけて市内の各地にボランティアさんが行きます。その一台のバスが、この大街道の方へやってまいります、小学校に来て、やることがないのです。やることなくてみんな帰って行ってしまいます。

ところが小学校の周りは、惨憺たる泥だらけの状態にあるわけです。映像をお見せします。ここが、大街道小学校で、海から割と近いところです。泥だらけの現状のなかで、みなさん呆然とされています。家のまわりはこんなような状態です。家々がどこもこのように泥だらけです。こんな状態なのに、ボランティアはやることなくて帰ってくるのです。どうしてだか、わかりますか。ここの地区は大街道地区といって、町内会はあるのですが、町内会の役割は運動会をやることと文化祭をやることだけです。あとのことは、市役所から近いものですから全部本庁管理なのです。だから、自分たちで意思決定をする必要がなかったのです。そして、どこの家から始めるかが大変難しく、利害関係が絡みますから、それを住民が役所の職員がいない状況の中でできない状況となったのです。

この避難所には常時二人行政職員がいるのですが、その二人はほとんど10日交代でくる東久留米市とか、大宮市とか県外の行政職員で、カギの管理と配給物資の配布しかできず、決める人がいないわけです。ここで、たまたま私どもの行った学生たちの多くが社会福祉の専門職の勉強をしていたのでソーシャルワークを入れて、話し合いの場をつくりました。すると、さーっと列ができて、順番ができて、あそこのおばあちゃんは一人数だから、あそこから始めた方がいいとか、あそこは小さい子がいるから先にした方がいいというような話が出てきて、その中で順番が決まっていきました。そうすると、その次からは、うちの学生もやりますが、外からきたボランティアさんもそこに行ってください、あそこに行ってくださいといって、1、2週間できれいにすることができました。最後、松本大の硬式野球部が0泊3日、夕方6時に出て、朝の6時から働いて、夕方6時に乗って帰ってくるというのを3回やりました。そうしたら、きれいになりました。

町の中で楽しいことをやろうとか、親睦会をやろうとか運動会だとかやろうとするのは

できるのです。しかし、利害関係が絡むようなことを住民が自分たちで決めることになることができなくなってしまいます。松本でも、葬祭センターをどうするかというような問題もめめます。今の町会長さんや区長さんたちで、そういうことを決めるというのは酷です。それだけの民主的な手続きを踏んでなっているわけでもない場合が多く、また、覚悟をもってやっているわけでもない方もおられます。そういう中で、これからは地方の時代だ、地域分権だ、住民主体だ、都市内分権だ、と書いて住民にやってくださいといってもできません。

松本で一番大きい町内会の予算でさえ、数百万のレベルです。これが何千万とかそんなような金を行政から渡されて、自分たちで決めてくださいと言われても困ります。住民が自分たちの地域をどうするかっていう基盤がなくなっているともいえます。

阪神大震災から東日本大震災まで 20 年に 1 篇でしたが、20 年に 1 篇ぐらいでこういうものが起こるとすれば、これから日本の各地でこういうことが次々起こることも考えられます。その時に初めて、さあどうしようでは遅いのです。特に、人と人のかかわりというものが、人の命を左右するってこともわかってきました。

例えば、阪神大震災では、たくさんの学生がなくなっています。どうしてかという、朝遅くて夜遅くて近所の人たちと顔を合わせなくて、だれが住んでいるかもわからない状態がありました。建物が倒壊して 15 分で火が回ってくるときに、人を助けるために一番大切なことは何かという、その人がいないことに気づくことなのです。人がいるのかいないのかわからなければ助けようがないのです。そうして、多くの若い人たちが阪神大震災で犠牲になりました。対極は白馬の地震です。あれだけの大きな地震がありながら地域の人たちがすぐに動いて助け出しました。犠牲者が 0 でした。このようなことを考えていくと、もう一度私たちは社会のあり方とか、行政のあり方も含めて、問い直していかないといけない現状と言えるのではないのでしょうか。

村八分という言葉があります。村の中で悪いことをやって端によけられる。八分といっているので残りの二分があります。二分は何かというと火事と葬式です。火事はえらいことですからみんなで消します。葬式は大事なこととして行う。ところが、今、地域の中で、火事や葬式がどうなっているかという消防団とかは人が集まらなくて困っています。消防団も高齢化しています。火事が出たら消防署に電話し、行政機能がそれを担保するようになっています。お葬式は、地域の中でお葬式をあげる人はほとんどいなくて、セレモニーセンターのようなところで行うようになってきました。お金はかかるけど、楽ということがあります。お浄めをやっても酔っぱらって家に帰ってくれないけど、セレモニーセンターのようなところだとすぐ帰ってくれます。係員が来て、お開きですという帰ります。お金はかかりますけど、楽でいいということもあります。

日本の社会というのは経済と行政と 2 つの歯車でぐんぐん豊かになってきました。その歯車の行政と経済によって地域でやるものがなくなってきたのです。かつての地域社会は、特に長野県はそうですけども、農村コミュニティーですから生産組織だったわけです。だから地域の主な目的というのは農作業の共同作業です。昭和 30 年までは、石炭燃料は入りま

せんから、基本的に共同作業でやるわけです。人力、畜力でやります。そうすると田植え、稲刈りというのはみんなでやりましようとなります。それから、水路、ため池、生活に必要なエネルギー源だった里山、入会地、財産区、こういうものをきちんと管理して、みんなが安全に暮らし、みんなが飯を食べることができるようにと、地域社会とかコミュニティーというのは、必要な組織でした。

ところが戦後、これが変わります。先ほど言ったように村の外でお金が稼げるようになります。昭和30年ごろから機械が入るようになると、余剰労働力が生まれて農村にそんなに人がいなくなりました。農村から外に出て稼ぐことができるようになります。そうすると個人のお金で稼ぐようになります。

今、公民館なんかで、文化祭やったり運動会やったりすると人が集まらなくて困っているところがあります。役員のなり手がなくて困っているところもあります。昔は運動会が盛んでした。運動会しか楽しみがなかったから、厳しい生活の中である種、地域の中で連帯感を共有する場だったのです。ところが今は、フィットネスクラブもあればスポーツクラブもあります。少年団とか、クラブチームとかでサッカーや野球やバスケットなどをやっている子どもたちが多いです。そうすると、運動会や体育協会に集まってやる意味がなくなるのです。

地域社会の中で、地域社会がだめになったという人がいます。その中で公民館の活動の範囲も縮小してきたという人がいます。しかし、地域がだめになったわけじゃなくて、役割を失ったといった方が正確です。公民館の役割を個人がお金で買うようになってきました。かつては公民館に行って、講座に出ていたけれど、そのうち、公民館では嫌な人と一緒にやらないといけないし、聞きたくないことも聞かされたり、月に一回トイレの当番が回ってきたりして公民館に行かなくなり、カルチャーセンターに行くような人も出てきました。ここでは、自分たちでお金を出して自分の好きなものを好きな人と好きなように好きな時間だけ行って帰ってあげればいいのです。公民館で、終わった後、お茶を飲みながら漬物をつつくよりも、喫茶店に行ってコーヒーゼリーを食べた方がいいと考える人が出てきたのです。だから公民館に行かなくなって社会教育に行かなくなった人たちが多くなってきたといえます。

個人のお金と行政機能という2つによって、地域社会の役割が失われ、その地域社会の役割の中で公民館自体や社会教育についても変わってきました。図書館もそうです。図書館もかつては本を読む場、借りる場だったのが、DVDだとか、いろいろな店ができることで変わってきました。今、そこが問われているのだと思います。

一方で、かつて田舎の若者は、田舎を嫌って、都会に出ていきました。人間というものは一人では生きていけない社会的な動物ですので、群れをつくりまします。村をつくると言った方がいいでしょう。都会に村をつくったのです。どういう村かという、会社という村です。会社が村だというとすごくわかりやすいです。要するにかつて農業をやったように会社で飯を食う。ほとんどの時間を過ごし、基本的にはそこが第一優先になります。日本の村社会

を引きずっているのだと思うのですが、町内会の旅行が部内旅行か課内旅行。運動会が会社のゴルフコンペだったり、家族大運動会だったり。世界中でも、職場で運動会をやるというのは日本だけではないでしょうか。要するに、村をそこに作り直したのです。かつての村との違いは、家族と一緒にそこにいないことです。

戦後、日本の社会の中で、専業主婦という新しい社会的な属性をもつグループが誕生してきました。都会の村に移り住んだわけです。そして、自分たちがやらなくても行政がやってくれるか個人のお金で解決できるからみんなで集まっているいろいろ考えてやらなくてもよいとなってきたのがこの60年の社会だと思うのです。このままいけるのであればいいのですが、そうじゃなくなり始めてきました。日本を支えてきた行政と経済の2つの歯車が少し軋み始め、金属疲労を起こしてきたのです。かつて永住の地だった都会の村が突然ある日なくなるようなことが起こります。

私もまだ覚えていますが、山一証券が倒産した時、ものすごい衝撃が走りました。みんな倒産しないと思っていたからです。でも倒産したのです。リストラという名前で村から放り出されたり、就職難という名前で村に入れてもらえなくなったりすることも出てきました。年金をもらって村で悠々自適だと思っていたら、年金がもらえなくなる、こういう社会の中で、もう一度村をどこに作ろうか模索しているのが今の社会だと思うのです。従って、最近、国も含めて地域とか地方とか言い出しています。ちょっと前までは、地域なんて見向きされていませんでした。私どもの大学が平成14年度に大学をつくったときに地域に根差し、地域と連携した大学って標榜したら、1年につぶれるからあそこはいかない方がいいと言われたこともありました。ある新聞社がつぶれる大学の取材にと、できたその年の春に来ました。地域なんかで飯が食えるのか、地域なんか大学でやることなのか、90分座っていられないから地域に連れ出すのかとも言われたことがありました。ところがここ数年、「COC知の拠点」事業を、文科省は今、大学の一番の重点的な事業にしています。今は地域が注目されているのです。だからこそ、どうして地域が大事なのかということをもう一回きちんと考えなくてははいけません。

それから、やっぱり理由があって地域が衰退をしてきたってことが大事です。昔の地域に戻りたいかってきかれてどうですか。地縁、血縁、人の悪口密の味。高校生の女の子が家に帰ってきたとき、おばあちゃんが立っていたそうです。何の気なしに自転車からこんにちとはと挨拶をしたら、おばあちゃんが何を勘違いしたのか、わざわざ私のために自転車を降りて挨拶をしてくれたとあって涙を流して喜んだそうです。この話は、その日のうちは美談だったんですけど、次の日になると話が変わります。あそこのうちのお嫁さん、おばあちゃんをいじめているらしいよ。娘が自転車降りただけでおばあちゃん泣いたんだからって話になるのです。それが、地域のうわさになる。嫌ですよ。

松本もちょっと前までは女鳥羽川の一斉清掃があって、出ないと不足金をとられるのですが、女性が出たら半額取られました。おじいさんたちが何もやらないで座っている横で女の人が一生懸命働いて、出不足金でそのおじいさんたちが酒を飲むっていうのは腹が立ち

ます。地域社会が本当にいいかっていうとよくないこともあるのです。

松本である社協が、見守り安全ネットワークというのをやりました。一人暮らしのおばあちゃんがいたからみんなで見守りましょうと。朝9時になってもカーテンが開いてなかったら倒れているかもしれないから見に行ってみようかといっていました。理想はそうなのですが、現実には違いました。あるおばあちゃんが「あの人にはみてもらいたくない。」って言ったそうです。必ずしも隣近所の仲がいいってことはないのです。まして新興住宅地など、回覧板を玄関前に置いたら走って帰ってくるって人間関係がたくさんあるわけです。その中で、きれいごとではなくて、地域をどうしていくかってことは大変難しいことなのです。

私は地域で暮らすというのは異質な人と一緒に暮らすということだと考えています。今までの村組織というのは、そのルールとか宿命をつくってきましたが、そこが少し壊れかけたときに、もう一度どうするかというのが大事です。かといって、かつてに戻れるかというと思いません。

私の町会でラジオ体操をやりました。朝の6時半からみなさんおはようございますってやります。公民館の前でラジオ体操をやっていたのですが、いつの間にか公民館の裏のアパートが看護婦さんに寮になっていたのです。朝の6時半からおはようございますというのは迷惑だという話になって育成会に頼んでラジオを録音して違う場所で7時からやるようになりました。そうしましたら、今度は、子どもを家に残して働きに出る核家族のお母さんたちは、6時半にやってくれば、7時に一緒にご飯を食べて、お母さんいってらっしゃいって内側からカギを掛けられるというのです。7時からやると自分が出かけた後、子どもがカギを開けて家に7時半に入ってくる。働く母親からすれば一日の気分が全く違うわけです。

価値観や生活態度がこれだけ多様化した社会の中で、昔のように右向け右ってわけにはいなくなりました。ましては、それをやらないと暮らしていけないというならみんなやりますけれど、なんとかなるなら、わざわざ煩わしいところに関わらなくてもいいのではないかと考えます。そういうことが今の社会の中だとすれば、地域を昔のように戻すとか、地域を復興させるのではなくて、地域を新しく作り直す、再構築と呼んでいるのですが、新しく作り直すようなものが必要なのです。そのためには、何かが真ん中ないとみんな一緒にやりません。地域を大事にしましょうといっても何のために地域を大事にするかというのがなければ、なかなか地域は回っていきません。

震災のときは、あっという間に地域がまとまりました。それは共に生き抜くからです。でも、それがだんだん平常に戻るに従ってまたばらばらになっていきます。共通のプロジェクトをどうやって地域の中でつくっていくのが大事です。これから地域をきちっと機能させ、そこに住んでいる人たちが地域をきちっと担っていくときに、最初に必要なのが共通のプロジェクトをどうつくっていくかなのです。これを専門的には地域課題という言葉でよくいいます。みんながそこに向けて一致できるものがあるかないか、それが多分、地域の中

で極めて重要なのだと思います。

かつて大学の教員になる前は、この前バングラディッシュの事件で被害に遭ってしまった開発コンサルタントの会社に勤めていました。アルメックというのは僕も一緒に仕事をしたところです。地域開発、地域社会が専門だったものですから、大規模開発の調査、研究等をずっと日本コーエンという会社にてやっていました。10年ぐらいそこにいたわけですが、その中でいろいろ考えることがあって、信州にやって来て当時、信州大学にいた玉井袈裟男先生に弟子入りして村づくりを一生懸命勉強しました。

ところが、先生から地域づくりを教わったのですが、あまり地域づくりがいるとは思えなかったのです。この前も、ある村に行って話をしたんですが、「この村のことを考えると夜も眠れない方は手を挙げてください。」といったら誰も手を挙げませんでした。一番前で村長も笑っていたので夜眠れるのに違いないと思いました。要するに眠れないほど困ってないわけです。長野県の教育について困って夜眠れない人もいらっしゃるのではないのでしょうか。でも、自分の子どものこととなるとみんな困ります。要するに人間というのは、個人の問題からスタートしないと本気にならないのです。

割と早い時期に飯田で公民館の副館長さんをなさっていた方が私におっしゃられたのは「地域で自分がどう生きるかを考えた。」とおっしゃったのです。一人の人間が一人の人として生きるということをスタートにしないと、人間は本気にならない。ところがですね、問題は、一人一人の問題からスタートしなきゃ本気にならないのですが、一人一人の問題をみんなバラバラでいっている限りは全く前に進みません。その中に何が必要かという、一人一人の問題や課題をみんなの問題や課題に変えていく仕組みが必要なのです。

長野県というのは、かつて、ありとあらゆる公民館、婦人会、地域の中で、生活改善グループあるいは保健補導員といった取組をずいぶんしてきました。例えば、生活改善グループなんかも、いろんな手法を使いながら一人一人の農家のお嫁さんの問題や課題を地域の問題や課題にとらえ直していきました。あるいは、保健補導員制度も家族計画といったただ避妊具を配るだけでなく、なぜそういう問題があるのか地域みんなが共有する課題なのだと男性も含めて議論する中で広めていきました。要するに、学習的な手法で地域をつくってきた経緯が長野県にはあるのです。あるいは、厚生連の健康づくりもそうです。そういう意味では長野県というのは、まさに教育県と言われるのにふさわしいと思います。そして、いまだにそういう意味では教育県だと思います。

そういうことを講演会で言っていると、90ぐらいの腰の曲がったおばあちゃんが、私は昔、家健保グループだったと教えてくれました。ずっと勉強されているのです。だから、そんなに難しいことはありません。要するにきちっとした合意形成の仕組みをどこでつくるのかということが極めて重要なのです。だとすれば、間違いなく、公民館というのは、そういうものを一番手近でできる可能性のある場じゃないかと思います。逆風の中ではあるけども、これから先に期待をしていくところだと思います。

その一方で、公民館の現状は厳しいです。もう10年ぐらい前になりますけども、梓川の

公民館に講演会で呼ばれました。当時の主事さんが、ちょっと早く来てほしいと言われたので、30分くらい前に早く行きました。そして、会場の体育館ロビーで、館長さんと主事さんと3人で打ち合わせをしていますと、分館の役員研修で来られた方が、私たちがいるのを知ってか知らないでか、「もうやめようよ。公民館なんて。館長、いつまでやるだいね。」と言って入って来るのです。ところが、その日のタイトルは「公民館がんばろう」なんです。これはいけないと、90分の講演の内容を15分に縮小させて、200人いたので、10人ずつ20のグループに分けてグループディスカッションをやることにしました。タイトルは「公民館の課題を出し合おう」です。最後に1テーブルずつ発表いただいたところ、だいたい2つに集約されました。1つは、「今のような公民館なら必要がない。」役員のなり手はない、人は集まらない、大変だということです。もう一つ共通してでてきたのは、「公民館のようなものは必要だ。」ということです。当時、自己責任ってことが言われていた時期でした。そして、高齢化が進み、地域の中を揺るがすような事件がたくさん起こっていた時期でもありました。自分たちの地域の生活にとっても不安を抱えていた時期でした。孤立感、孤独感をもっている中で、今まで、当たり前だからめんどくさく思っていた公民館をいきなりなくしていいのだろうかという、恐怖にも近いような思いがあったのです。今のような公民館ならいらなくても、公民館のようなものはいるのだと、相反した思いが同時に出てきました。じゃあなんだったらいいのか、どこが大事なのか考える時期なのだろうなと思いました。

行政と経済の波の中で公民館の役割がだんだん薄れてきて公民館のやることがなくなってきて、残ったのは自己実現でした。そして、文化にかかわるものが残りましたが、もう一度、地域課題、生活課題に取り組むような時代になり始めたと思います。例えば、今、子ども食堂というのが行われていますが、子ども食堂は貧困の問題です。貧困の問題は、日本では今までなかったような気がしていましたが、現実に今起き始めています。

大きな問題は、例えば、買い物弱者の問題です。500m以内に買い物する所がないお年寄りが買い物に行けなくて困っています。長野県は幸いにそんなに深刻化はしていません。中山間地はそもそも昔から買い物弱者地帯ですから、宅配だとか様々なものをやって生き抜いてきたので、あまり困ってないのです。松本で入山辺と奈川と中心市街地の調査をしましたけども、買い物に対する不満あるいは満足度は、ほとんど変わりませんでした。

ところが、日本で一番買い物弱者について困っているのは、高島平団地です。高島平団地のある層の上の5階、エレベータが長いです。重いものをもって並んでいます。調査をしたら、栄養失調の方がたくさんいらっしゃったのです。中には2年間、重たいお米をもっていけず、お米を食べていなかったおじいさんがいらっしゃいました。考えてみれば核家族で入られて、子どもたちが出て行き、高齢者だけ残るようになり、購買力が落ちて店がなくなっていきました。そうすると本当に何にもないところになっていきます。多摩ニュータウンもそうです。松本でいえば、寿台とかですね。新興住宅地だったところが危ないのです。今後もっとひどくなるはずですが、松本の市内の中でもお城から西側、線路までは全部買い物弱者地帯です。開智のスーパーマーケットがなくなって以来、全部買い物弱者地帯になって

しまいました。今、大型商業施設がないので、大変なのです。

要は、もう一度地域のあり方を考えなくてはいけない時期に間違いなくきているということです。こういう問題をだれが考えるのでしょうか。例えば買い物の問題は地域によって全く違います。移動販売車が来たらうまくいく地域もあれば、来てもだれも買わない地域もあります。むしろ、宅配の方がいい地域もあります。要するに、地域の特性があって地域の人が自分たちで解決策を考えない限り解決しない問題なのです。福祉もそうだと思います。従って、そこをどうしていくのかがこれからの課題だと思っています。これが地域課題ということなのです。

さて、何から始めるかについてです。よく公民館でも講演を頼まれたときにみなさんにお話しするのですが、次に何をやるかってことが大事です。基本的には、やりながら考えることが大事だと考えます。意識は行動を変えません。男女共同参画を勉強してもお皿一つ洗ったことがない人もいます。環境問題を勉強しても車に乗るのをやめない人もいます。意識は行動を変えません。温度計を見て寒いと言っているようなものです。寒いから温度計をみるものです。行動が先なのです。

100人の一歩という考えが社会教育は好きです。みんなで考えてやりましょうと。ところが、実際の現実の社会では、ありえません。100人いれば、嫌だという人が7、8人はいますから前に進みません。一人の100歩が大事なのです。一人の100歩で、まず、気づいた人が100歩主体的に動きます。その後、100歩行って止まるということが大事です。100歩行って止まって後ろを見ましょうと。そうすると、よければついて来るから前にいけばいいですし、悪ければ、戻ればいいのです。ところが100人が一歩踏み出しちゃうと戻れません。地域でいろんなことをする取り掛かりのところで、みんなで議論をしてみんなで仲良くやりましょうというのは失敗するかもしれません。逆に気が付いた人がいろいろなことをトライして、その中から地域の中のいろんなことをみんなが共有していくやり方がいいでしょう。そうすると、共有する場が必要になってきます。そして、一人一人が動いたことを持ち寄ってみんなの経験として一つの方向にまとめていく組織が必要です。

もう一つ、地域課題とは何かよくわかりませんとよく言われます。地域に行くと、職員の方が申し訳なさそうな顔をして、「先生、今日はちょっと人が少ないです。あまりみなさん困ってないのです。危機感がないのです。」とおっしゃりました。これは結構なことです。危機感があるようになったらこれは大変です。どうしようもなくなった時には本気でやります。ただ問題は、本当は危機に直面しているのに気が付かないことがあります。例えば、ゆでガエルという言葉があって、カエルをぬるま湯に入れておき、熱くしていくと、そのうち死んでしまいます。ところが、熱い中、冷たい中に入れると飛び出してしまいます。これは、どうしたら危機感をもってもらえるかってことが大切なのです。危機感をもつためには何が必要か。それは、「やってみただけできない」という経験です。例えば、公民館で行事をやると、やってみて人が集まらないと思うとこれは大変だと思うわけです。やらないで考えてもだめなのです。やってみると言うことが大事です。

今後の社会教育で考えなくてはいけないことですが、公民館等で何かお金に絡むようなことをすると社会教育施設はお金はいけないとよく言われます。あるいは、コミュニティービジネスというのがあって、コミュニティーの中で地域の課題を自分たちでビジネスの手法を使って変えていくというものです。これが今、全国でも取り組まれています。しかし、そういうものは、公民館にとってふさわしくないのではないかという議論も起こっています。ところが、人間は、もうかるか、おもしろいかで動く傾向があります。特にお金は、大きな動機となります。

よく私も地域の中で、古くからいらっしゃる方と新しい方の狭間で困ることがあります。何か共通してできることはないかと考える時、そういう人たちが一緒にできそうな一番はお金を稼ぐようなことです。お金は地域の「かすがい」とでもいいでしょうか。ただ長野県の方はプライドが高いものですから、最初は嫌だと言います。ある地域でプルーンジャムを作ったときに組合長さんが、「先生、金のためにやってはいない。村のためにやっている。年金をもらっているから赤字になっても困らない。」と言っておりました。ところがお金は関係ないといっていたため、ジャムを持ち帰った人がいました。すると「ただで持って行った。」と怒っていました。やはりお金の意識があるのです。

よく考えてみると地域社会が衰退していった一つの原因はお金の流れや経済の流れが地域社会からなくなったことです。買い物弱者もそうです。村の外で稼いだお金を村の外で使っていましたが、引退して村に住みついたらたんに自分の周りで買うところなくなっていったということです。経済というものをお金というものをもう一度どういう風に地域の中でとらえていくかというのは、とても大事な役割なのです。長くこういうことに関してはタブーだと耳にしてきたのですが、地域を考えていくときにお金を回していくことは極めて重要なのです。

慶応義塾大学の先生が、野沢温泉村を東京海上の研究所と一緒に調査をしてコモンズという概念を打ち出しています。以前、コモンズ支援金というのをやりまして、私は第一回の選考員になって大変でした。コモンズは、講。お金の貸し借りです。決議機関といった意思決定の仕組みがあります。集落の中には、お金を回すもの、地域を回すもの、人を回すものという機能があるといっています。それをコモンズと金子ゆきお先生は指摘をされました。これからの地域社会はこういう形を参考にして考えなくてはいけないと提起されました。

例えば、沖縄に共同売店というものがあります。これは買い物の問題ですごく注目されました。沖縄の人たちが自分たちでお金を出資して自分たちで人を雇って売店を作ります。そのためコンビニは沖縄になかなかできません。共同売店は、奨学金を出したり、お金が足りなかったときにお金を貸し付けたりします。昔は泡盛を作ったり、船を買って舟運をやったり、そういう地域社会の経済を回すような役割を果たしていたのです。お金とか経済というものをどのように捉えるかということ今後の大きな課題だと思います。地域の現実の中では、やっぱり、ここを抜きでは考えられないだろうと思います。

公民館の役割についてまとめてみます。社会教育には3つの役割があります。1つ目は、

「学習の拠点」です。これは、地域課題の共有と解決において、一人一人の問題をみんなの問題にしていくことです。それを実践的に考えていくという役割です。2つ目は、「自治の拠点」です。異質な人と一緒に暮らしていくための仕組みをつくる必要があります。それから、家庭自治って聞いたことがありますか。我が家は毎月最終金曜日の午後7時から台所を議場にして翌月の予算を審議するなんて家はないと思います。そういうことをしなくてもやっていける集団と、そういうことをやらないといけない集団というのが社会の中にあります。だとすれば、そこをどうするかが社会教育の課題なのです。3つ目が、「実践の拠点」です。考えるだけじゃなくて動きましょうということです。先ほどのやりながら考えるという意味でも実践を積み重ねながら物事を変えていく、こういうような機能をきちんともったような形にしていかないとこれからの社会教育、公民館というのはうまくいかないのではないかと思います。

松本も町会長さんたちが何人もいらっしゃいますが、よく町会長さんたちが地域の方々の理解が大切になるような課題に直面されます。葬祭センターもそうでしたし、ごみの問題などいろいろあります。そういう場合、かかわっている役員さん、町会長さんの精神的な負担がかなり大きく、やめてしまう方もいます。やっぱり、その責務が重すぎるのです。あるいは町会長さんたちをリーダーとして判断したり決断したり活躍できるだけの土壌が住民側の土壌を含めてできていません。そこをどうしていくのかが課題だとお話もしました。私は、それを長野県はつくってきたと思います。

イギリスの国営放送BBCが日本の戦後50年という特集番組を今から20年ほど前につくりました。その時に長野県の顔としてそこに登場した方がいました。それはもうお亡くなりになったのですが須坂の保健婦をされていた方でした。この方は須坂と合併した旧高保村に日本で初めて保健補導員制度というものをつくられた方です。その彼女は、公民館主事さんの自転車の後ろに乗って各地の公民館を歩き、夫婦だけじゃなくて地域の区長さんとかいろいろ人を呼んで、いかに家族計画が大事かという話をされたのです。当時、子どもをたくさん産んで母体にいろんな被害があったり、子どもが多すぎるのが社会問題になったりしたときに、ただ上からこうしろとか、避妊具を配るのではなく、なぜ必要なのか、子どもが3人なら、こういう教育ができたり、こういう農業経営ができたりするというシュミレーションを学習会としてやりました。地域の住民に納得してもらい、家族計画のプログラムを進めていった方なのです。

まさに長野県のリーダーの一人だと思います。亡くなる前にお話をさせてもらった時に、こういうことをおっしゃりました。「人間には寒ければ服を着る。暑ければ服を脱ぐという力があります。私たち保健婦は服を脱ぎなさい、着なさいと指示や命令をするのが仕事ではなく、その人たちが服を着たり脱いだりする本来持っている力をどうやって伸ばすかを考える仕事です。」と。これは保健婦さんだけでなく、我々教員もそうですが、専門職といわれる人たちの役割だろうと思います。命令したり指示したりするのではなく、その人たちが自分たちで自立してできるような力を養っていくことだと思います。そういう意味から

すると公民館の主事さんだとか公民館の役員、あるいは社会教育にかかわる職員のみなさんは、どちらかという指示や命令をする役ではなく、いかにその人たちを支えて伸ばしていけるか、そういう役割だと思います。

もう一つ大事なことがあります。社会教育や公民館をどうしていくかというときに、そこに携わる人たち、あるいは地域でリーダーだったり、専門職だったり、行政職員だったりする人たちの役割も一方で必要だと思います。そういうものが融合しながら住民の自立的な動きとそれをサポートする仕組みがあって始めて地域がうまく回っていきます。その接点が公民館ではないかと思います。松本市は市民運動がなかなか育たないといわれております。スパイクタイヤの追放運動は札幌も仙台も市民が行政や企業を追い詰める形で成功しますが、松本は公民館が真ん中に入って学習会を行い、企業や行政を巻き込んでスパイク運動をしました。そして一番遅く取り掛かって一番早くスパイクを追放しました。そういう意味では、公民館という社会教育が住民と行政との接点となっています。

一時、住民協働という言葉がはやりました。最近は聞かなくなりました。大変なのでやめたのではないかと思います。行政職員がやった方が早いのです。かつてはそれでよかった。私がコンサルタント会社にいた頃、2月、3月になると役所の方から1週間おきに2百万、3百万の契約更新で、予算消化のため予算が増えるのです。当時はバブルのころでしたから、予算を消化することが大事であって、それがうまくいくかどうかは二の次だという時代がありました。行政も100やったら、10ぐらいうまくいけばいいという時代が実際にありました。しかし、今は一つやったら一つうまくいかなくてもいけない時代です。そういう時代なので、何かをやるときに地域の人たちがちゃんとしないとうまくいかないのです。

景観を守りましょうという時に、地域の人たちがその気にならなければいくら行政が制度や条例や計画をつくっても動かないです。看板規制もそうです。看板を出してはいけないっていったら倉庫の壁に看板をかいて、これは倉庫の壁だという人がいるくらいです。ルールを作れば破るわけです。そこに住んでいる人たちが自分たちできちんとそれを理解して進めることがあって初めてこれからの行政もうまくいくと思っています。いってみれば、これからは、そういう役割を果たさなければいけないと思います。

公民館というか社会教育をベースにして街づくりをして、ある危機を乗り切った町の例を具体例として話します。松本駅のアルプス口と呼んでいます。昔、西口といわれた地域のお話です。今から15年ぐらい前になりますが、住宅がたくさん並んでいるような場所でした。長野駅の東口がこんな感じだったと思います。ここに駅前広場を作り、国道の方から大型バスを駅まで寄せるってことで道路の拡幅をするという計画が持ち上がりました。この地域は高齢者が6割以上を占める地域で、昔の国鉄の鉄道官舎を払い下げたところに人が住みついた地域です。なので、古い新興住宅地みたいなところがあって、その中に昔の地主さんが点々といらっしゃる町です。ここで工事をやることになり、立ち退きが必要となりました。90世帯、幅上西町会があったのですが、そのうち30世帯が立ち退きの対象になりました。

普通の駅ですが、西口は住宅地みたいな感じです。アルプスの景観がよく見えるところです。この整備事業が始まりました。昔、西口に入る道路がありました。ここは今、歩道ぐらいいなっています。そして、22m道路ができました。ここは全部立ち退きになりました。昔は小さな駅だったのに、今は大きな駅になり、道路も共立病院であるのですが、共立病院の前の道路も拡幅しました。

そんな中で、町の人たちは大変動揺します。高齢化している地域で3分の2の人たちがいなくなります。しかも地域のど真ん中に22mの大きな道路ができるのです。あるおばあさんが、「大きな川が流れているようで向こうに渡れないよ」とおっしゃったそうです。コミュニティの崩壊の危機になります。そんな中で、なんとかしようとする動きが生まれます。この地域は新興住宅地でお祭りがなかったの、まずはお祭りをやろうということで七夕の時に野菜市などをやりました。

これから先、公民館をベースに町づくりの学習を積み重ねました。4年で80回やりました。景観を守ろうということをもみんなで議論をしました。福祉広場で学習会をやりました。松本大の学生が作った模型を作りながら、もしビルができたならこうなるなんて議論をしました。お年寄りが多いため、死ぬまでここで安心して暮らしたいというのが町づくりの柱になったものですから、セニアカーだとか車いすをお借りして実際にバリアフリーの調査をやりました。町づくりの柱としては、2つありました。景観を守ろうと、アルプスの稜線を遮るような建物を作らせないというのが一つ。それから、安心して歩いて暮らせる町を作ろうというのが一つ。この2つの柱で始まりました。

景観を守ろうということに関しては、周りの人から私はすいぶんと反対をされました。「先生、それは無理だ。23万都市の駅前にビルが一つも建たないなんてことはない。」「年寄りが何かやっても経済の大きな波の前に流されてしまうからやめておきましょう。」と多くの方がおっしゃいました。ところが、ビルが建たなかったのです。渚にはビルが一個だけあります。そのビルができたために、やっぱりだめだと言っていました。田川地区は一個も建ちませんでした。

なぜ建たなかったのか。長野駅の東口の区画整備事業のお話も聞きに行きましたし、小布施だとかいろんなところにみんなで視察に行って話を聞いたり、いろんな人に来てもらって勉強会をやったりしました。そういう中で、学生と一緒に住民が自分たちで調査をしました。東口のビルを全部調べました。そうしたら、松本駅の東口のビルの4階以上にテナントが入っていないということをつきとめたのです。しかも、ビルのオーナーはほとんどが変わっていました。みんな借金が払えずにビルを手放していました。そして、入っているのは、カラオケ、風俗、水商売、コンタクト、英会話。ごろごろ変わっています。松本を利用された方で、松本駅前のデパートなどのビル以外は登ったことがないのではないのでしょうか。東京や新宿は、交通公共機関が発達していますから、駅の周辺に店舗や事務所を構えないとお客さんが来ないです。ところが、長野県のような地方都市は、車で移動しますから駅前に店を作ったら家賃以上に駐車場がかかってしまうので、駅から離れて駐車場がたくさんとれ

るところに店舗や事務所を構えるわけです。よく考えてみたら、駅前にビルを建てても入らないのです。このことにだれも気が付かなかったのです。それで、その話を学習会でしましたら、「ビルを建ててもしょうがないんだ。」となりました。だから、だれも土地を売らなかったのです。売らなかったから建たなかったのです。

そして、景観を守ろうとなり、その動きを受けて松本市は松本市景観基本計画を作りました。ここの地区は14mの高さ規制を上乗せで入れています。松本市もよい景観を作りたいかったのです。私はコンサルタントをしていたものですから、東京のゼネコンにいわせると、松本はやりやすいと言うのです。何かをすると必ず住民が割れて、地価が下がるなどといって「高さ規制はいけない」となり、やりやすいと言うのです。この巾上の人たちが動いたことで市も背中を押されました。あるいは、市も安心して基本計画を立てられました。なぜなら、きちんと活用してくれる地区が一つあるからです。だから行政も動けたのです。賢い住民をきちんと作っていくことが大事です。主体的に自分たちが地域を本当に動かしていくという覚悟と能力と経験をもつことです。景観を守ったことでこの町は元気になりました。

日本レンタカーさんの看板ですが、赤と白が反対になっているのは全国でここだけです。景観を配慮して白と赤を反対にした看板を作ってくださいました。しかもこれは京都でお店が使っている環境配慮型の人工工学的に目に余り入らない赤を使っています。そういう中で、いばらん亭という、蕎麦屋をお年寄りが始めました。この話は長くなるので今日はやめておきますが、今も週2回、今日もやっています。

その中で、この地区で動いていることがあります。ちょうど駅前の渚に、樹齢600年を超えるけやきの木が18本あるお宅があります。これは大変に歴史的にも貴重なものであって、市の記念樹にも指定をされています。一方で、その落ち葉が一日で50cm積もるのです。それで、ご近所迷惑になってしまい、訴訟も辞さないというような、地域の大きな問題になっていました。このけやきは大きくて国道からも駅からも見えます。

これを今、けやきプロジェクトとあって、学生とその地区の小学校の子どもたちと一緒に、けやきの落ち葉を拾ったり、焼き芋をしたりしています。落ち葉もパッカー車じゃないと運べないので、パッカー車に3台くらい来てもらっています。落ち葉や木を利用して商品開発したものを作って売り、資金の足しにしたりしました。

この春に、けやきだけでなく、町会を中心に、町の緑をどうするかということについて考える会を設立しました。町会は、町会の中で意見の対立があるものですから、公民館も入りました。地域づくりセンターを松本市はおいているものですから、そこと連携して会をつくって動き出しました。そうしましたら、市がその後すぐに記念樹の制度を見直し始めました。

学習によって自分たちの町をこう考えて作っていくことがすごく大事なのです。この町に関わった学生たちが「町づくりというのは難しいことだと思っていたけどそうじゃない。町をつくるということは人の心を変えていくことなんだ。」と言いました。人の心さえ変われば何かができるということです。この幅上は、まさにそういうところでした。

長くなりましたが、本当は、もう一つだけ飯田OIDE長姫高校が5年前から公民館と松

本大学と飯田市と連携協定を結び、地域人教育をしている話をしようと思っていました。これは、3年間で280時間のカリキュラムを組んで活動しています。テレビでも飯田OIDE長姫高校の生徒をよく取り上げていました。すごい人材を育てつつあります。飯田のことを勉強して学んで自分たちの進路を考えようというもので、飯田のことを知り、学び、飯田の人とつながって飯田を担う人を育てます。その中でも公民館がその受け手になっています。

こんなところで時間がまいりましたので私の話を終わりにさせていただきます。どうもご清聴ありがとうございました。

5 議長選出

6 協 議

① 社会教育の現状と課題について

【西議長】

議長に選出されました信州大学の西でございます。よろしくお願いいたします。

白戸先生には、具体的な地域の様子、それからお考えを端的にまとめていただきました。ありがとうございました。白戸先生には、この後の協議に入っていただいて、ご意見やご助言をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

限られた時間でございますので、協議に入ってまいりたいと思います。ただ今の白戸先生のご講演等について、ご質問等をいただければと思います。いかがでしょうか。

【西村委員】

飯田の西村と申します。先生の話をお聴いて大変参考になりました。その中で、気になることがあります。最後の方で飯田OIDE長姫高校の話がちょっと出たのですが、飯田は公民館活動の先進地と言われてまして、前段、先生のお話を聴いてまして、今では、飯田ではそういうことは遭遇しておりません。先生は、飯田で公民館活動を実際に見ていただけましたでしょうか。先生の話では、将来そうなるだろうという予測は立つのですが、そんな危機的な状況ではありません。それと、飯田では町づくり委員会の中に公民館活動、子ども委員会とかいろいろな委員会があるのですが、非常に活発に動いています。運動会を始め、地域の行事、それからゴミ集めとかそういうことをやっています。地域の住民は、ゴミ集めとか清掃作業は自発的に高齢者を除いております。若いものだけでやっているという状況でございます。

それと、ちょっと話がずれますが、昨年、国勢調査がありました。私は調査員として携わっていてびっくりしたのですが、この飯田の平坦地、穀倉地帯、田園地帯というか果樹の広がっている地域ですが、その中をみてびっくりしました。ほとんど一人暮らし二人暮らしで

す。二世帯、三世帯で暮らしている世帯はほとんどありません。5年10年しますと大きな家が建っているても、中身はいいないことになるのではないかと思います。先生は高齢化のことに触れなかったのですが、これからの町づくりに一番重要じゃないか。核がなくなっていて、家はあるが住民がいないという世界が広がるんじゃないかと考えると、恐ろしい気がします。先生には、もう一回飯田の現状をみていただきと思います。そして飯田は活発に動いていると言わしていただきたいと思います。

【白戸教授】

言葉が足りなかったと思うんですが、今日話したのは、飯田の話ではなく全体的な公民館の話です。おっしゃるとおり、飯田に行くとき「公民館する」という言葉があります。私は、飯田の公民館にはいろいろとかかわらせてもらっているんで、全くおっしゃったとおりです。竜丘にしても上境にしても、飯田みたいになればいいなと思いますので、誤解だということでもよろしくお願ひします。

【西議長】

他の委員からいかがでしょうか。

今日の白戸先生のお話では、実際の地域のそれぞれの問題だとか、公民館活動などがありました。あと、最後の方では、地域の中で高齢者の方たちと若い人たちとの学びというものが話題になっていたと思います。

そういった面から様々なご意見をいただければと思います。今日は、最終的に何か意見を集約する形ではございませんので、今日のご講演を踏まえながらご意見を頂戴したいと思います。よろしくお願ひします。いかがでしょうか。

【中島委員】

白戸先生のお話を何回か飯田の公民館大会等で聴かせていただいて勉強させていただいております。先生のお話の前段階の方で生涯学習と社会教育の大きな流れをかいつまんですっきりと整理していただきました。

また、これからの長野県の生涯学習という言葉が使われておりますけれど、教育振興基本計画のあり方を作っていくときに、社会教育という言葉のみにこだわってはいけないと思います。やはり、生涯学習と社会教育と概念が違いますので、個から始まる自学自習で生涯にわたり学び続けていこうという生涯学習ではなくて、社会教育は、組織的に教える、教えられたものがまた教えるという組織的な教育だという面をしっかりと位置付けていくことが今大事だと私は思っています。白戸先生もそうおっしゃられたと聞いています。県の方々がおられるので行政的にも、言葉の意味をきちっと出していった方が、長野県の今後のためによいと思います。先生から一言いただければと思います。

【白戸教授】

言葉は、私も大変大事だと思います。ただ、社会教育という言葉の「教育」という言葉自体も誤解を招くところがあります。本来、学習と教育と言ったときに、対峙をする日本語ではあります。しかし、本来、英語のエデュケーションの中には、学習的な意味合いも実は入っていて、その言葉遣いがすごく難しいと思います。

社会教育という言葉も嫌いではないので、個人的にはいいなと思っていますが、それよりも、どっちの言葉を使うにしても、社会教育というと、ほとんどの方は自分の経験した公民館とか図書館とか社会教育をベースに考えをされます。なので、なかなか議論がかみ合わない部分があるのです。そういう意味でいうと、社会教育、生涯学習の言葉からもう一歩、もうちょっと具体的なところで示すことが大事だと思います。生涯学習にしても、社会教育にしても例えば、先ほど言った一人の問題をみんなの問題にするとか、わかりやすい言葉を補うことで、誤解を解いていく、統一していくことが大切だと思います。

【西議長】

他、どうでしょうか。中田委員お願いします。

【中田委員】

先生のお話の中で、時代を背負っていくという部分で、先生はお立場上、学生さんたちと一緒にやりながらなので、若者と一緒ということだと思います。若者とは、どのへんのことをいうのかなと考えています。今、地区の役員をされている方たちは、60代ですが、みなさん働いています。それで、今私たちが考えているのは、働いている40代、50代くらいの人たちを次の地域を背負っていく人たちとして地域づくりの中に入れていただきたいなと思っています。

お話の中で、先生が、「無理矢理にではなくて、人の心を変えていかななくてはできない」とおっしゃいました。それを今、ずっしりと感じています。40代から50代くらいの人たちを生涯学習的な事業に誘い込むということについて先生のお考えをいただければと思います。

【白戸教授】

すごく難しい質問なのですが、一つは、30年ぐらい前の若い世代、30代、40代は、地域に対して否定的な見方をされる方が多かったです。今の30代、40代の方たちは、むしろそのへんは変わってきているのではないかと私自身は感じています。

特に2つの大きな震災を経て、地域ということに向き合うような機会を日本の中でもてたからではないかと思います。私は今、50代ですが、今住んでいる所は、40代ぐらいで家を建てて20年ぐらい住んでいる方です。この前も、町内の一斉清掃があったのですが、昔みたいに拒否感があるという感じは少なくなっています。

衛生部長をやる人がいなくて困っていたら、女性二人が手を上げ、二人で衛生部長をやっていたいくことになりました。とにかくみんなが衛生部長になれば、そのうち衛生部長はいらなくなるからそれまで衛生部長をがんばりましょうって言っていました。このような方たちが着実に増えています。地域の活動をしようとする方はいらっしゃるので、中田さんがおっしゃったように、そういう人たちをどうつかむかは極めて大事です。

もう一つは、働き方の問題もあるのかなと思います。私どもの学生が就職した時に、東京に就職した子たちと比べると、地域に就職した子どもたちは離職率が極端に低いです。それはなぜかを大学で調査したことがあります。辞めるときというのは、入社して4ヶ月ぐらいとか、1年目とか、3年間の間にありがちです。東京で就職すると、生活の中で仕事の比率が100%に近いです。東京で、大学の同級生とかと飲むと傷をなめ合います。そのうちにやめようってなります。

地元の就職では、うちの学生をみてみますと、消防団とか、早起き野球だとか、お祭り青年団とか、ぼんぼんの踊る会を作って年に何回か飲み会をするだとかをする場合が多いようです。そういう中で、縦のつながりができます。そうすると、「おれも辞めたかったんだ」とかいう話が出てきて、意外とそこで踏みとどまるケースが多いようです。

要するに、働き方の問題として捉えていくべきで、30代、40代、あるいは20代の人たちが、どうしたら地域の活動や社会教育に関われるかは、地域の側だけで考えるのではなく、企業などにも考えてほしいのです。企業を巻き込むようなモチベーションをもたせないとなかなかうまくいきません。少年団の指導者を企業の方がよくやられています、会社に気を遣いながらやってらっしゃる方もいます。なので、働き方の問題としても検討する必要があります。そういうものをクリアできないと難しいと考えます。

【西議長】

中條委員どうぞ。

【中條委員】

中島さんや中田さんがおっしゃったことにかかわってくると思いますが、私も生涯学習と社会教育にかかわることについてずっとモヤモヤとしていたのですが、今日、先生のお話をお聴きいたしましてスッキリしたなと思っております。

それで、早めに送っていただきました、「新しい時代にふさわしい長野県の生涯学習のあり方について」の答申というのを読ませていただきまして、平成21年の10月に答申をされているにもかかわらず、今このまま出してもいいぐらいしっかり作られているなと思いました。これがすべてクリアしていたら、この結果を第3次教育振興基本計画に入れてもいいなと思うぐらいしっかり作っていただいていたと思います。納得するものです。これが県内の公民館にどのように伝わっているかというのが一つ問題であるかなと思っております。

おっしゃられましたように、個人の学習や趣味的なことにとずっと公民館が使われてきま

した。そのため、地域の課題の解決というところまで、公民館の中でできていなかったかな、伝わってなかったかなと思います。そこが一つ問題かなと思います。

まとめていただいたのを全部みれば、公民館だけでできるのかなと思います。学校教育課もありますし、すべての行政の縦割りの部分のところに全部かかわってくることでございます。町づくりイコール他の行政とどんな形で結び付けていくのかが一つの問題点だと思っております。

公民館が拠点になって、リーダーシップをとっていくのはそうですけれど、公民館の中に、キャリア教育という言葉があるのが少し理解できなかったところです。そういうリーダーシップをとれるようなキャリアを積んでいく職員とかも大切なこれからの課題になっていくのかなと思います。よろしくお願いします。

【白戸教授】

最後の職員の話からすると、公民館の主事さんたちが悩むのは、住民を自立させて住民に自主的にやってもらうことが、つきはなしているようになってしまい、自立させているのかがどうもあいまいなままになっていることです。時間が来ると、じゃあ自立ねって、つきはなすようになって、せっかく積み上げたものがつぶれてしまうことがあったり、主事さんたちが替わっていく中で、途切れていくことがあったりしました。

社会教育主事の資格も昔に比べると取りにくくなっています。昔は制度的にも保障されている市町村が多かったのですが、今はそうともいえません。ですが、専門職が必要だと思います。正統的なカリキュラムとして、学芸員とか図書館司書とかはありますが、地域の専門職を育てるカリキュラムは置いていません。

松本大学の教員採用は、ここのところ社会教育の人をとろうと決めています。学生に対しても、地域に対しても、命令するタイプではなくて、いろんな力を引き出しながら動かしていくタイプが必要です。社会教育の人は、そういう人が多いので経験的にそうしました。

そういう人材をきちっと一方で育てていくのも大事です。しかし、地域に対する専門職はないのです。うちの学科でいうと、観光と福祉と地域と標榜していますが、観光は旅行取扱という国家資格があり、福祉は社会福祉士という国家資格がありますが、地域となるとありません。そういう意味でも地域にかかわるような専門職を育てるのは今後必要だと思います。

それと、この答申は、県として作ったものが現場まで到達し、現場を本当に動かすかという心配はありました。ところが、この後、現場の公民館長さんたちで作る団体の公民館運営協議会がアクションプランを作っていただいております。1年近く時間をかけて全県の公民館の関係者が委員会に入って議論をしています。自分たちの現場に近い形でブレイクダウンしたような、長野県らしい公民館に磨きをかけるような提言やこれからの長野県公民館と県公運協のあり方についてというのを翌年に出しています。いくつかの市町村では、かなり浸透した部分もあるのかなと思います。

しかし、まだまだもちろん足りないので、そこは進めていけたらよいと思います。おっしゃるとおり、作ればよいというものではなくて、これをどう浸透させるかというのも一つ今後の議論の焦点になるかと思います。

【西議長】

あと、いかがでしょうか。

後半の方のけやきの話で、学校、子どもたち、それから大学生、そして地域といったかわりによって、地域の活性化であるとか、子どもたちが地域を知っていく、そのような点も一つ話題になっていたところです。今年度、県としても高等学校で信州学達成目標が100%になっているはずです。

今日は、紹介されませんでした。飯田OIDE長姫高校の活動がそういったところにも具体化されているのだらうと思います。そういった教育にかかわるところで、子どもたちをみている側から、あるいは青年の指導、リーダーの養成という立場からご発言いただきたいと思いますが、いかがでしょうか。中村委員お願いします。

【中村委員】

現状から子どもの方へ返っていきたいと思いますが、7月1日に北信地区の社会教育委員連絡協議会総会・地区研修会がございました。山ノ内で参加させていただきました。ワークショップがありまして、テーマが公民館活動の充実のためということで、社会教育委員として何ができるかということ熟議形式でグループごとに行いました。その時「社会教育委員という名前で任命されたけれど実は何をどうしていいのかわからない、とても困っているんだ。」という生の言葉が出てまいりました。「公民館の行事を運営すればそれでいいのか。」というご意見もありました。ワークショップではない今日のような会議でも、「我々は何をしたらいいのか教えてほしい。」という声を多く聞きました。設定は、熟議という形で付箋も配られてどういうことをやるべきか、よりよい方向はどういうことなのかということを探ることでありましたので、みなさん大人ですからちゃんとそれに従ってやってくださいました。たいしたもんだなあと思いました。けれども、100名近い北信の社会教育委員が、一番困っていることは「何をしたらいいのかわからない」という実態がございました。

また、事業計画や決算などを見せてもらいましたが、北信全体で30万円という配分でありまして、活動していくのにも金銭的な裏付けがなかなか厳しいものでありました。あくまでも住民一人一人、社会教育委員一人一人のボランティア精神から成り立っているのかなと思いました。その時に、白戸先生のお話を聴いていれば、みなさん、奮い立ったのではないかと思って聴いておりました。

白戸先生が大学でやっていることはとても価値があると思います。社会に出る前に社会と関わる経験を持った大人にしていくよう子どもを育てていかなければいけないということを感じております。私たちは今、信州型コミュニティスクールを導入し、小学校も中学校

も社会や地域の力をいただいて、子どもたちを育てていこうということに取り組んでいます。しかし、それがとてもうまくいく学校と、本当にたくさんの壁があって、できなくて苦しんでいる学校もたくさんあります。いつまでにはできるようにと県からも指針をいただいております。しかし、実状によっては本当に厳しいということがわかっていただければ大変ありがたいなと思います。私は、松代の方の校長をやり、今は豊野中学校の校長をやっています。地域は大変協力的です。ただ、地域の気持ちがあっても、じゃあ、何をどうしたらいいかっていうのは、具体が見えないと本当に難しいことでもあります。これから社会教育委員会や行政の中からお示しいただいたり、みなさんに知恵をいただいたりできれば思っております。

子どもたちが大人になるときは、半数以上の職業がなくなって新しいものにとって替わっていくといわれています。学校の方でも今、21世紀を生き抜く力をつけるということで、アクティブラーニングなどに取り組んでいます。自分が動く、アクティブというところで社会ともかかわる力を子どもたちにつけていきたいと思います。頑張りたいと思います。よろしくをお願いします。

【西議長】

ありがとうございました。あと、いかがでしょうか。
伴委員、お願いします。

【伴委員】

白戸先生ありがとうございました。

先生が冒頭で、生涯学習と社会教育の学びの違いについてご示唆いただき、改めて社会教育委員などという立場をいただいている自分の身が本当に引き締まる思いでした。頑張ります。

私は日常的に生涯学習課に勤務しております。子どもたちとの関わりやそれから先ほど中村先生がおっしゃったように信州型コミュニティスクールという活動を一緒に進めさせていただいております。その中で、公民館ではないですが、公立の学校の中に地域の皆様方がお入りになることで、学校の中に小さな村ができつつあることを肌で感じています。

まだ、地域の皆様方が、自立して自主的に進めていくところまでは立ち至っていませんけれども、子どもたちとの交流の中で地域の皆様方が背筋をぴんと伸ばし、生きがいを感じている様子を拝見しております。公民館というものと並行して学校の中に公民館のようなものができていくということも今後の新しいスタイルなのかなと先生のお話をお聴きし、改めて感じさせていただきました。ありがとうございました。

【西議長】

他にいかがでしょうか。原委員お願いします。

【原委員】

話の筋がちょっと違うかもしれませんが、20年前に浅間温泉に複合保育園というのができました。同じ屋根の下に福祉広場と児童センターと保育園ができて、わあ、すごいなって思いました。いつも3世代が同居する保育園ということで私はとてもそれを誇りに思い、これからの時代はこういう時代がくるんだと思ったことを覚えています。

その時に、白戸先生に出会いまして、地域づくりのこの話をさせていただきました。そして、高齢者に優しい地域は障がい者にも子どもたちにも優しい地域であると、地域についてみんなで考えておりました。私たちは、保育園の園長、幼稚園の園長、小学校の校長、警察署の署長、郵便局長、それから消防署長、温泉協会の会長、支所長、とかそういう人がいつも集まり、トップ会談をしておりました。みんなで子どもたちのこと、老人のことなど話し合いました。温泉街で目の悪い方が結構いらして、信号を渡るときなど、白い杖について渡っているところをみんなで守ろうという話をしていたことを覚えています。

その当時から白戸先生は行動をし続けている方だと思っておりました。今日も行動している話をお聴きし、感激しています。今、私がいる立場の団体も行動をし続ける団体ということで、自分たちに力をつけて社会に還元できるよう取り組んでいます。特に女性たちの活動支援をしております。そういう点では、小さい時から社会の中で生きるということをしっか子どもたちが知っていること、そして、大切なものは、お金とか、地位とか、名誉とかそういうことじゃなくて、目に見えないところに本当に大切な人たちの心があるんだよということを学ぶことが大切だと考えています。

自分たちの周りの心の温かさにふれながら、その中で自分たちが力をいただき、最後はみんなにお返しして、地域社会のために役に立ってほしいと思います。そういうことをお母さんになったり、自立した女性になったりしながら、次世代の人たちにつないでいく役目があるんだよっていうことを小さい時から体験をとおして学んでおります。

私は地域に戻りますと、民生委員をやっております。そうすると小学校でも、中学校でも呼んでくださりまして、地域の小学校の先生方全部と中学校の先生方全部との懇談会に出させていただいたり、地域の子どもたちの夏休み前の懇談会に必ず声がかかりますので、そういうところにも行って話をさせていただいたりもしています。

そういうことなどを通して思うことは、例えば、自分自身がガールスカウトの私というただそれだけの世界の中で、いろんなことを知ろうというのは限界があります。最後は地域の中へ戻って、その地域の人たちとつながることによってガールスカウトの活動を豊かに展開することができます。また、私たちの年代でいいことは、小さな年代、小学校へ上がる前の年長児から、死ぬまでスカウトと、いろんな年代の人と共にできるということです。そして、いろんな年代の方たちが、その地域の空間を埋める立場にいて、いろんな役に立っているのだろうと考えます。そうした時に、地域の中に、そういう拠点となる場所が、みんながいる居場所として、またつながる場所としてあることがとても有難いことだと思っ

ています。

これからもいろいろなことで、体験活動をとおして、社会とつながりたいと思っています。特にまた地元でご指導いただきながら、これからのことも考えていきたいと思っています。今日は、みんな目に浮かぶような地域のことがよくわかるお話を聴かせていただきまして、ありがとうございました。

【西議長】

ありがとうございました。白戸先生、いかがですか。

【白戸教授】

学校と地域ということが一つテーマとして出ました。大学でも最初に地域とどうやってつながっていかうかという議論をかなりしました。地域の人材を養成するのに地域とかわらないなんてあり得ません。公開講座とか社会人入学とか、いろんな形で地域と大学が接点をもつ機会はあります。しかし、それは多分本質ではないだろう、ならば学生を育てるといふ本務のところでは地域の人にかかわってもらわなければならないということになりました。一番抵抗したのは教授会でした。なんで我々の教育の場に地域の人が来てもらわなきゃならないのかと随分大変でした。

ですが、強硬に反対していた先生方が、ある時期から大変受け入れをしてくれるようになりました。それは何かというと、目の前で自分の学生が変わっていく、元気になっていくということがあったのです。

今、長野県商業教育研究会と一緒に全県を結んで、デパートサミットという事業を展開していますが、先生方も大変です。土日の休みの日に生徒を連れて時には朝 5 時とかに来ます。遠い地域に出かけていくこともいくつもあります。ですが、先生方がものすごく熱心に行われています。それは、生徒が目の前で変わっていくからなのです。K君ってテレビによく出てきますが、1年生のときは何もしゃべることができなくて、人はいいんだけど、先輩の後をただついて行っていたのですが、今は堂々としています。

目の前で子どもたちが育っていることを共有できるような仕組みの一つ作るといいなと思っています。そうはいつでも、学校と地域の間には、違う時間が流れている部分もありまして、学校では1日でできることが地域では1年かかったり、逆に地域では1日でできるのに、学校では1年かかったりすることもあります。そういうことをお互いに認識しつつ、そこを結びつけるような仕組みを作るとするのが大事だと思います。

原委員がおっしゃったようなトップ会談もそうです。あの時は、確か、ある中学校で問題があって、校長先生と教頭先生が来られて助けて下さいってお願いをされました。つながる仕組みとして、その時にコーディネーターを務めたのは公民館だった気がします。このように日常的なものが必要だと思います。

私は、学校評議員会では梓川高校、学校運営協議会では白馬高校にかかわらせていただい

ています。ですが、白馬では多いといっても4回です。でも、うちの大学は地元の新村地区と毎月1回情報交換会をやっています。こちらからは、3学部の学生委員長と学生課長、「ここ夢」という地域とかかわる機関の方が出席します。地域からは公民館長から始まって児童センター長、支所長などが出席します。そして月に一回雑談をします。雑談をする中で、例えば、「あそこのアパートの窓があいていて声大きいので、なんとか先生から言ってほしい。」というような話が出ます。それで未然に事なきを得るようなことが多々ありました。そういうことを積み重ねることが何かあったときに、地域と学校でやりましょうということにつながるのかなと思います。日常的な地道な付き合いをしていくこと、埋めなくてはいけないことを常に認識することです。

飯田OIDE長姫高校の地域人教育も毎年4月に学校の教員と公民館の主事さんとそれから我々で学習会をします。今までの経緯を含めて学校と地域の中でどんなトラブルがあり、どういうふうにそれを解決したかということをもみんなで持ち寄って議論をし、埋める努力をします。新しく来られた先生方はそういうことがよくわかってないので、ああそういうものなんだと理解していきます。こういうきちっとした仕組みを作っていないかと思いや理念だけではなかなかうまくいきません。学校も行政も職員が変わってしまうと、そこでふつんと切れてしまうことにもなってしまいます。仕組みを作っていくのは、とても必要だと思っています。

最後にもう一点、キャリア教育についてです。M中学校の子どもたちが、毎年行っているデパートサミットに見学に来ます。見学に来て、地元に戻って商店街の人たちと一緒に商品開発をして、10月か11月にチャレンジショップをやります。これはもともとキャリア教育でやっていました。中学生が職場体験に行くと地域の人よりはります。「働くのは大変だ。」「そんなんじゃないだめだぞ。」とか、厳しいことを言うてしまうようです。高校生ぐらいで、働く意欲が出てきて、働かなきゃいけないとわかってきた子にはいいのですが、中学生ぐらいだと、「それなら働かない。」となってしまう。だから、小学生、中学生は大人が生き生き働いているとか、働くことのおもしろさを体験させることの方がキャリア教育にふさわしいと思います。

そうすると、そこには地域が欠かせません。本当は親が家で生き生き働いていれば一番いいのですが、どうも家ではごろごろしている親を見て育つことが多いようです。こんなふうに働いているのかという姿を見たり、体験したり、共有したりして、キャリア教育については地域の出番がかなりあると思います。

【西議長】

ありがとうございました。浅輪委員、いかがでしょうか。

【浅輪委員】

白戸先生のお話をお聴きしましたところ、実は私の子どもも、実際に落ち葉拾いと焼き芋

の体験をさせていただきました。なかなか、落ち葉を集めて火をたくということができるといのは町中では少なくなっています。もちろん初めて体験した子もいたと思います。それが親ではなくお兄さんお姉さんだったり地域のおじさん、おばさんだったり、そういう関わりにより、その印象がだいぶ違い、得るものも違ってきます。その話を家に帰ってきて今日はこうしたああしたって話を聞くと、特に何か言うわけではないですが、聞くことが話すことにつながるのかなと思いつつ、「よかったね。」と言って聞いています。

それから実際親の立場として地域にかかわっていく年代にはなってきたのですが、やはり、高齢化社会というのを強く感じます。私の周りでも同じ年代の方が、県外なり市外なりに出ている方が多く、お二人とか一人暮らしの高齢者の方が多いというのを感じます。

しかし、高齢者の方たちをみていますと、私よりとっても元気な方が大勢いらっしゃいます。私が住む地区の中にも小さな公民館がいくつかあるのですが、その中の一つの公民館の話をさせていただきます。サロンというのを月2回やっています。そこは、全く何をやると決まっている訳ではなく、とりあえずその日にみんなが集まります。地域の何年か前の写真を持ってこられる人もいれば、自分の描いた絵を公民館に飾る人もいれば、自作の漬け物なりお菓子なりを持ってきて、そこでお茶を持って来る人がいます。そして、その輪ができて、そこに子どもたちも来るようになりました。新しく卓球台も取り入れたので、大喜びで子どもは遊び、大人も混じり、とそんな場所が作られました。

それは強制ではなく、時間をみてそのとき出て行ってみようという形です。こちらも負担なく、行けるときに顔を出せるというメリットがあります。何が何でも来なさいっていうと、ああ面倒くさいとか、この日は都合が悪いとかそういうふうになってきますが、そこはそうではなく、みんなが自由に集まれるところです。そういう場所を作っていただいたのがすごくよかったです。

それに加えて、震災のこともありますので、地域に住んでいる方たちが顔見知りになるということが大事になってきます。また、みなさん子どもたちのことも考えてくださるので、どのように安全に守れるかということを考えてくださいます。そして、「今度は炊き出し訓練みたいなのをやってみようか」と、そういう話が保護者の方から自然に出てきました。いい回転になっているなと思っています。

2, 3年前から県の方にも携わらせていただいています。何かをやるっていうと県は県、学校は学校、公民館は公民館、分裂しているところがあります。でも、やっていることはどこも一緒なので、そこがもどかしいです。どうして縦のつながりで一緒に出来ないのかと思ったときがありました。管轄が違くと聞きましたが、今日話を聞いていますとだんだんそれが縦の線になりつつあるというのは感じました。私たちはPTAという立場ですけれど、何かお手伝いできればと思います。

PTAの方でも保護者に発信していくというのに力を入れています。今、インターネットなどの社会になってきていますので、フェイスブックを立ち上げました。そこに意見をすることはできないのですが、こちらから情報発信をしていくことを今年度から取り入れていま

す。そこで輪が広がってみなさんに関心をもっていただけたら幸いに思います。

【西議長】

ありがとうございました。西村委員お願いします。

【西村委員】

社会教育には直接関係ないのですが、最近、業界のトップだとか、日本のトップクラスの人たちが不祥事や発言がよくないが続いています。私も、小さな子どもたちと携わっていて、日常会話の中に、その人の会話を取り出したりしていることがあります。非常に青少年に影響を与えていると思います。だれも触れてないので、触れさせていただきました。政治家なり、業界のトップが疑われるような発言をしたりして、資質が問題になっています。みなさん、どう考えているでしょうか。

それと参議院の選挙が終わりました。新聞各社の論説の中などで、選挙期間中、歯の浮くような公約を堂々と言っていました。ですが、選挙が終わって見直す期間とか世論というのが不足しています。是非、こういうことを見直す必要があるのではないのでしょうか。日本のトップクラスの人々が、日本語の重さというものをもっと感じていただいて、モラルというか、そういうものを身につけて実践してほしいと思います。約束していたのが次の日になったらころっと変わってしまっているのが日常茶飯事です。みなさん、どう考えているか、時間がないのですが、2、3お聞かせ願えればうれしいです。

【西議長】

ありがとうございます。それぞれお考えもあるかと思います。今回から、18歳投票という形で選挙権年齢が下がったということもあって、高校、大学でも随分動きがありました。選挙でどういうふうに候補者を選んでいくのかとか、どうやって私たちはみていけばいいのかというような話題は教育の現場でも取り上げられてきています。

また、家庭の中で、選挙の話題で会話ができるようになったというようなニュースも出ておりました。そういったところもまた、今後議論する機会となるかと思います。時間が迫っているものですから、申し訳ありません、こちらの方で取り上げさせていただきました。

まだ、ご意見をお持ちの方もおられると思いますが、そろそろ時間が迫っております。この議論につきましては、生涯学習審議会へつなげて議論を深めていければと考えております。

今日の社会教育委員と白戸先生を含めて、このメンバーと、他分野から委員を選任いたしまして、10月に生涯学習審議会を開催していく予定になっておりますので、よろしく願いいたします。白戸先生、委員の皆様の熱心なご討議それからご意見、ありがとうございました。

② 平成 28 年度社会教育振興事業補助金について

【西議長】

では、平成 28 年度の社会教育振興事業補助金についての協議に入ります。教育委員会より説明をお願いいたします。

【山越課長補佐兼生涯学習係長】 資料により説明

【西議長】

ありがとうございます。ご意見、ご質問があれば承けたまわりたいと思います。それぞれの対象事業につきまして、いかがでございましょうか。よろしいでしょうか。

では、補助金につきましての協議につきましてはこれで終了させていただきます。

以上をもちまして、本日の協議題をすべて終了とさせていただきます。ありがとうございました。

7 閉 会